

防止焦点は認知資源の温存効果に優れているのか？

○外山美樹¹・湯立²・肖雨知²・長峯聖人²・三和秀平³・相川充¹

(¹筑波大学人間系/CRET・²筑波大学人間総合科学研究科/CRET・³関西外国語大学外国語学部/CRET)

キーワード：制御焦点，促進焦点，防止焦点，温存，パフォーマンス

Is the prevention focus conserving cognitive resources?

Miki TOYAMA¹, Li TANG², Yuzhi XIAO², Masato NAGAMINE², Shuhei MIWA², and Atsushi AIKAWA¹

(^{1,2} University of Tsukuba / Center for Research on Educational Testing, ³ Kansai Gaidai University / CRET)

Key Words: regulatory focus, promotion focus, prevention focus, conservation, performance

【問題と目的】

Higgins (1997) の制御焦点理論では、人の目標志向性を促進焦点 (promotion focus) と防止焦点 (prevention focus) の 2 つに区別している。促進焦点は希望や理想を実現することを目標とし、進歩や獲得 (gain) の在・不在に焦点を当てる目標志向性である。一方、防止焦点は義務や責任を果たすことを目標とし、安全や損失 (loss) の在・不在に焦点を当てる目標志向性である。

Toyama et al. (2018) は、制御完了 (regulatory closure ; 目標が達成されているかどうか) の観点から、制御焦点とパフォーマンスの関連を検討した。その結果、制御未完了 (ある目標が未達成) 条件では促進焦点と防止焦点でパフォーマンスに差が見られないが、制御完了 (ある目標が達成される) 条件では、防止焦点は促進焦点よりも、後続のパフォーマンスが低いことが示された。こうした知見に関して、本研究では、認知資源の温存の観点から、制御焦点とパフォーマンスの関連を検討することを目的とした。本研究の仮説は「後続課題 (課題 3) の優先順位が高い場合にのみ、防止焦点は促進焦点に比べ、認知資源の温存動機づけが高く (仮説 1)、課題 2 のパフォーマンスが低い (仮説 2)。一方で温存している課題 3 のパフォーマンスが高い (仮説 3)」である。

【方法】

実験参加者 大学生 64 名 (男性 28 名, 女性 36 名 ; 平均年齢 19.39 ± 1.08 歳)。

実験計画 制御焦点 (促進, 防止) と課題の優先順位 (high, not high) の 2 要因を独立変数とする実験参加者間計画。

制御焦点の操作 促進焦点条件 ($n=32$) では、実験参加者の課題全体の成績が、一般大学生の平均以上 (上位 50% 以内) の成績に入るように教示し、防止焦点条件 ($n=32$) では、平均以下 (下位 50% 以内) の成績に入らないように教示した。

課題の優先順位の操作 課題 1 終了後に行った、課題 2 と課題 3 の説明の内容によって、課題 3 の優先順位を操作した。優先順位 high 条件 ($n=32$) では“課題 3 は非常に集中力を要する課題であるため、課題 2 よりも課題 3 のほうが、得点の比重が高い”と教示し、優先順位 not high 条件 ($n=32$) では“課題 2 と課題 3 で要する集中力は同程度であり、課題 2 と課題 3 の成績で全体の成績を出す”と教示した。

実験課題と実験手続き 実験は 1 人ずつ実験室で行った。まず、制御焦点の操作を行った後に、課題 1 (条件つきタイピング課題) を実施した。続いて、課題 2 を実施する前に、課題 3 の優先順位の操作を行った。その後、課題 2 (ストループ課題 : 箱田・渡辺, 2005) を実施した。課題 2 の後に、「温存動機づけ」の質問項目 5 項目に回答してもらった。最後に、課題 3 (計算課題 20 問, 制限時間 10 分) を実施した。

【結果と考察】

仮説 1 の検証 制御焦点 (促進焦点, 防止焦点) と課題の優

先順位 (high, not high) を独立変数、温存動機づけ得点を従属変数とする 2 要因分散分析を行った。その結果、交互作用 ($F(1, 60)=8.54, p=.01, \eta_p^2=.13$) が有意となった。制御焦点の単純主効果は、優先順位 high 条件においてのみ有意となり ($F(1, 60)=11.24, p=.00, \eta_p^2=.16$)、防止焦点条件が促進焦点条件よりも温存動機づけ得点が高かった。課題の優先順位の単純主効果は、防止焦点条件においてのみ有意となり ($F(1, 60)=12.22, p=.00, \eta_p^2=.17$)、優先順位 high 条件が優先順位 not high 条件よりも温存動機づけ得点が高かった。よって、仮説 1 が支持された。

仮説 2 の検証 制御焦点と課題の優先順位を独立変数、課題 2 のパフォーマンス (ストループ干渉率) を従属変数とする 2 要因分散分析を行った。その結果、交互作用 ($F(1, 60)=4.44, p=.04, \eta_p^2=.07$) が有意となった。制御焦点の単純主効果は、優先順位 high 条件においてのみ有意となり ($F(1, 60)=4.47, p=.04, \eta_p^2=.07$)、防止焦点条件が促進焦点条件よりもストループ干渉率が高かった (パフォーマンスが低かった)。課題の優先順位の単純主効果は、防止焦点条件においてのみ有意となり ($F(1, 60)=19.67, p=.00, \eta_p^2=.25$)、優先順位 high 条件が優先順位 not high 条件よりもストループ干渉率が高かった (パフォーマンスが低かった)。よって、仮説 2 が支持された。

仮説 3 の検証 制御焦点と課題の優先順位を独立変数、課題 3 のパフォーマンス得点を従属変数とする 2 要因分散分析を行った。その結果、交互作用 ($F(1, 60)=4.04, p=.047, \eta_p^2=.06$) が有意となった。制御焦点の単純主効果検定は、優先順位 high 条件においてのみ有意傾向となり ($F(1, 60)=3.67, p=.06, \eta_p^2=.06$)、防止焦点条件が促進焦点条件よりも課題のパフォーマンス得点が有意傾向で高かった。課題の優先順位の単純主効果は、防止焦点条件においてのみ有意となり ($F(1, 60)=5.52, p=.02, \eta_p^2=.08$)、優先順位 high 条件が優先順位 not high 条件よりもパフォーマンス得点が高かった (Figure 1)。よって、仮説 3 が支持された。

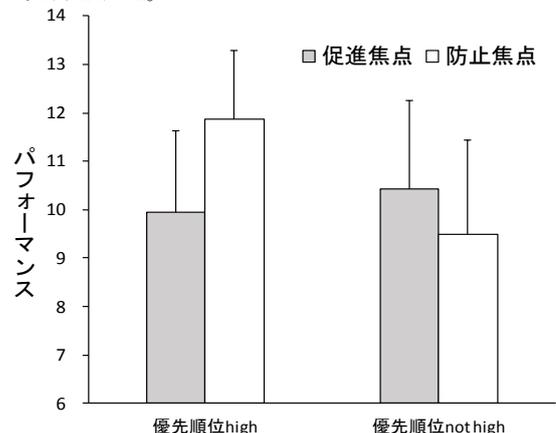


Figure 1. 制御焦点と課題の優先順位がパフォーマンスに及ぼす影響。